



認知症介護指導者養成研修におけるアウトカム評価を 目的とした指導者活動実態調査

主任研究者 山口 友佑（認知症介護研究・研修大府センター研究部）

背景・目的

認知症介護研究・研修センターでは、2023年度末までに2,880人の認知症介護指導者（以下：指導者）を養成している。本研究では、認知症介護指導者研修修了後の活動実態を明らかにし、指導者研修のアウトカム評価（成果）について検証することを目的とする。

方法

- 2023年度までの修了生で、調査基準に該当した2,312名に質問紙調査を実施した。
- 研修のねらいより、①実践研修等の企画・立案、講師役、ファシリテーター（以下、研修の役割）、②介護保険施設・事業者等における介護の質の改善に向けた指導的役割（以下、指導的役割）、③地域における認知症施策の推進への貢献（以下、地域での役割）を修了生に求められる役割と設定し、研修修了後に役割を実践できているか（短期的成果）、継続的に実践できているか（長期的成果）をアウトカム評価の基準とした。
- 主な調査内容は、①研修の役割の実施状況、②指導的役割の実施状況、③地域での役割の実施状況、④認知症地域支援推進員との連携状況である。

結果

- 23年度修了生では、各役割とも9割程度の修了生が関与または実践していた。「研修の役割」では、「会議への出席」が多く、研修別では、「認知症介護実践者研修」が多かった。「指導的役割」では、自施設で指導的役割を担っている修了生が多く、実践内容として、職場内研修の企画立案の役割を担っているが多かった。「地域での役割」では、カテゴリー別の実践状況では、「相談事業」が7割弱と最も高く、主な実践内容として、「家族介護者からの相談対応」が多かった。
- 22年度以前の修了生では、各役割とも8割弱の修了生が実践しており、研修の役割（ $p<.01$ ）、指導者役割（ $p<.01$ ）、地域での役割（ $p<.05$ ）とも、活動歴が短い時期から実践している傾向が見られた。「研修の役割」では、講師役で関与している傾向が高く、10年未満の指導者が多く関与している傾向が見られた（ $p<.01$ ）。「指導的役割」では、自施設での指導的役割を担っていた修了生が多く、5年未満の指導者が多く担っていた傾向が見られた（ $p<.01$ ）。実践内容としては、職場内研修の企画立案が多かった。「地域での役割」では、「研修事業」が6割弱と最も高く、実践内容として、「家族介護者からの相談対応」を実践している傾向が高かった。推進員との連携については、9割弱の指導者が連携して実施した活動がないという回答が多かった。

考察

- 研修修了生に求められる役割について、各役割とも修了後に実践することが出来ていること、継続的に活動を実践できている状況が確認できたことから、指導者研修の短期的成果、長期的成果を達成出来ていることが確認できた。
- 認知症地域支援推進員といった認知症施策に関連する専門職との連携が少ない傾向があり、指導者研修や指導者フォローアップ研修、都道府県・市町村担当者、認知症施策に関連する専門職に対して継続的に周知・啓発を行い、指導者の役割に関する理解の促進を行っていくことが必要である。

まとめ

各役割について、修了後から実践することが出来ており、また継続的に実践できている状況が確認することができた。今後、継続的に研修修了生の活動状況について把握し、横断的效果を検討していく。また活動実態調査の結果や既存データを確認し、データ構築を行い、縦断的效果を検討していく。